本書の書写人について他の尊経閣文庫の古典籍と比較した結果、古巻子本『吉日抄』と筆跡を同じくすることを認め得た。同書末には異筆で「以先父自筆之証本書写与愚息長周訖、是宋人呉祐之筆也、司儀令丹波〔花押〕」なる奥書がある。また同文庫の古巻子本『座右抄』の料紙には本書と同様の具注暦用卦紙が用いてある。これらのことも含め、今後さらに本書について書誌・内容の両面から研究を進めていく必要があると考えている。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究部）

28 小島原泰民とその訳（著）書

○谷津三雄、渋谷　鉱

小島原泰民には『歯科病理各論』上・下巻（明治二三年刊）、『歯科小枝』（同年刊）、『歯科解剖学』（同二四年刊）、『歯科生理学』（同二六年刊）、『実地必携内科攬要』（同二六年刊）、『裁判歯科学』（同二七年刊）、『歯科冶金学』（同二九年刊）、『歯科必読外科通論、全』（同年刊）、『歯科病理各論、完』（同三〇年刊）、『歯科生理学』再版（同三一年刊）、『畸形歯論』（同三二年刊）、『齲歯矯正術』（同三三年刊）、『歯科解剖図譜』（同三五年刊）など多数の著（訳）書があり、これらの著書がわが国の黎明期における歯科界に及した影響は、計り知れないものがある。

小島原泰民は安政五年（一八五八）二月二四日、福島県会津高田町大字藤家館字藤田の農家の五男として生れる。

子供のとき、どもりがちで母親はその育て方に大変苦心した。子供の頃から脚立の上に板をのせ、その上で砂で調剤ごっこをして遊んでいたという。一四～一五歳頃、若松の医師斎藤幸元先生宅に書生に入り、よく外国語を堪能した。一六歳のとき上京。苦労して、明治二一年四月二六日、医術開業試験に合格、東京の牛込区神楽坂二―一〇において賛化堂医院として内科を開業、かたわら警察医を行っていた。その間、海軍省の嘱託、東京歯科専門医学校（明治二一年〈一八八八〉四月、京橋区弥左衛門町に創立されたわが国最初の歯科医育機関）、歯科矯和会（明治二一年八月二一日創立）、明治二二年九月に歯科講義会と改称。更に私立大日本歯科講義会（年代不詳）と改称した。また、長交会（明治三一年設立）などで講習会の講師として勤務、その間に欧米の医学書、歯学書を読破し訳し、あるいは講義録として次々と発行した。その後、日本歯科医学専門学校創立当時（明治四二年八月）の法医学教授として名を連ねたが、登校することなく、病気で奥様と娘さん、および孫二人の全部をなくしたのを機に、東京での開業をやめ故郷に帰省して会津高田町赤留街道で開業していた。大正六年（一九一七）五月二一日五九歳で没した。会津高田町の医王院常照山大光寺に医勲院芳誉泰民清居士として眠っている。

なお、東京歯科専門医学校は久保田豊と医師石橋泉の二名で明治二一年四月一一日認可、同年五月五日開講したが、校長の石橋泉が六月四日から登校しないので、久保田が一人で維持できないので、明治二一年八月三一日に廃校届けを出している。その後間もなく、久保田から全く同じ名称の「東京歯科専門医学校」で「専ラ歯科医学ヲ教授シ歯科医ヲ養成スル目的」とし、明治二一年九月六日付で日本橋区蛎殻町に設立を出願。同年一〇月一日開校し、明治三二年一一月まで経営されていた。また、石橋泉も明治二一年九月一八日付で同校名、しかも、同じ目的を掲げ、下谷区御徒町で設立願いを提出し、九月二三日認可、その後、神田区錦町に移り、一一月五日に開校、同二二年一一月六日付で廃校した。すなわち、東京歯科専門医学校という同名の学校は三校あったことになる。

（日本大学松戸歯学部）